



第147回 他者を理解するとはどういうことか？

私たちは日常の中で、よく「その気持ち、わかるよ」と言う。しかし、本当に他者を理解するとは、どういうことだろうか。

他者を理解することは、単に相手の情報を集めることではない。むしろ、「わかった」と思った瞬間に、私たちは相手を自分の知識や経験の枠組みに押し込めてしまうことがある。「この病気ならこう感じるはずだ」「あの人はこういうタイプだ」と決めつけたとき、その人だけが持つ固有の経験はこぼれ落ちてしまう。

▼サルトルの「まなざし」

フランスの哲学者サルトルは、他者との関係を「まなざし」という言葉で考えた。私たちは一人ではいるとき、自分が世界を見ている主体である。しかし、誰かに見られた瞬間、自分もまた「見られるもの」になる。

たとえば、誰にも見られていないと思って行動していた人が、背後の足音に気づいた瞬間、急に恥ずかしさを覚える。自由に振る舞っていたはずの自分が、他者のまなざしによって「そういう人」として固定されてしまうのである。

医療や介護、教育の場でも同じことが起こる。患者を「糖尿病の人」「認知症の人」「困った患者」と見た瞬間、その人は一つのカテゴリーに閉じ込められる。しかし、その人は病名や属性だけでは尽くせない存在である。

▼レヴィナスの「顔」

一方、哲学者レヴィナスは、他者を「理解すべき対象」ではなく、私に呼びかけてくる存在として考えた。彼のいう「顔」とは、単なる外見ではない。傷つきやすく、無防備で、「ここにいる」と訴えてくる他者の現れである。

苦しんでいる人、不安そうに黙っている人、助けを求める人。その顔は、言葉になる前に、すでに私たちに何かを呼びかけている。レヴィ

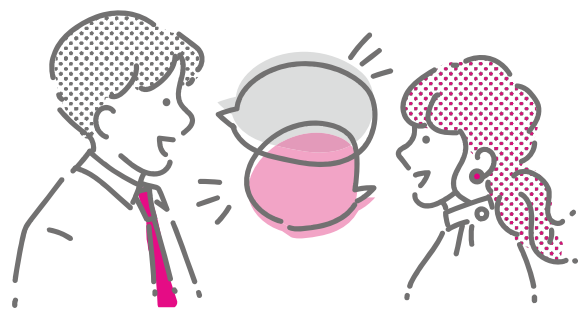
ナスにとって、他者の顔は「この人を見捨ててはならない」という倫理的な呼びかけであった。

大切なのは、相手を完全に理解してから関わるのではない、という点である。私たちは、よくわからないままでも、目の前の苦しみに気づき、立ち止まり、声をかける。その応答から、他者との関係は始まる。

▼わからなさに耐える

他者を理解するとは、「あなたのことは全部わかった」と言うことではない。むしろ、「私はあなたをまだ十分には知らない」と認めるところから始まる。

わからなさは、関係の失敗ではない。それは、「私とは違うあなた」がそこにいるという証である。完全にはわからない他者の前で、わかったつもりにならず、それでも耳を傾け、応答し続けること。その終わりのない営みこそが、他者を理解することなのだと思う。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
准教授

孫 大輔
(そん だいすけ)